
ぼくはもうすぐお兄ちゃんになる

霜月 沙羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼくはもうすぐお兄ちゃんになる

【Nコード】

N1529R

【作者名】

霜月 沙羅

【あらすじ】

ぼくのお母さんに赤ちゃんが出来た。でも、ぼくはあまり嬉しくない。お姉ちゃんは喜んでいてるけど。薫さんは、どうなんだろう？
黄昏症候群 (<http://ip.tosp.co.jp/iasp?i=membersara>)との重複投稿です。

ぼくのお母さんに赤ちゃんが出来た。たっくんはもうすぐお兄ちゃんになるのよ、と言われた。お兄ちゃんになるってどういうこと？ って訊いたら、好きなものを我慢したりしないといけないのよ、と言われてぼくはあまり嬉しくなかった。でも、ぼくのお姉ちゃんは喜んでいた。

「お母さん。私、妹が欲しい」

お姉ちゃんが言った。

「たっくんは妹と弟、どっちが欲しい？」

お母さんがぼくに尋ねる。

「どっちも欲しくないよ」

だって、ぼくを構ってくれなくなりそうだから。

「たっくんはもうお兄ちゃんなんだからね」

「お兄ちゃんになんかなりたくない！」

そう言ってお母さんのお腹をぽこつと殴った。するとお母さんはぼくを叩いて、

「そんなことしたら駄目ですよ！」

と叱った。ぼくはその日一日拗ねてご飯を食べなかった。

「たっくん、今日は」

薫さんが訪ねてきた。

「今日は！」

「いい返事だねえ。お母さんは？」

「今お風呂入ってるよ」

「そう。たっくんは公園にでも行って遊んで来なさい」
「うん」

公園に行くとお姉ちゃんが友達と縄跳びをしていた。

「お姉ちゃん、ぼくも縄跳びしたい」

お姉ちゃんに言うつと、

「あんた縄跳びなんて出来ないでしょ」

と言われた。出来るもん！　と言いつけていたら縄跳びを渡してくれて、跳ぼうとしてみたけど足に突つかかってしまった。

「だから言っただじゃない。ほら、子供は砂遊びでもしてる！」

「お姉ちゃんだって子供じゃなかあ……」

渋々ぼくは砂場で遊び始めた。夕日が辺りを照らし出す頃、ぼくは家に帰った。お母さんと薫さんと一緒にご飯を食べる。食事の最中、ぼくはお母さんに訊いてみた。

「赤ちゃん、あとどれくらいで産まれるの？」

すると薫さんは酷く驚いた顔をして、

「美智子、赤ちゃん出来たの!？」

と言った。お母さんはやりと笑って、

「……実はそうなの」

と言った。

「太っただけじゃなかったんだ……」

「後でゆっくり話しましょう」

ご飯を食べ終わってから、お母さんの部屋でお母さんと薫さんが何やら話をしていた。夜の七時を過ぎた頃お母さんが部屋から出てきて、

「そつえばお姉ちゃん帰ってこないわね。どうしたのかしら」

と言った。八時になるとお母さんはお姉ちゃんの友達の家をかけたりと落ち着かない様子を見せた。

「捜しに行つてこようかしら。とりあえず、お父さんに電話した方がいいかしら」

お父さんは単身赴任で家にいない。

「美智子、落ち着いて。九時になったら一緒に捜しに行こう。旦那に電話するのももう少し待った方がいい」

薫さんはそう言ってお母さんを落ち着かせた。お母さんが自分の部屋に戻ると、薫さんがぼくに言った。

「実は、お姉ちゃんの居場所知ってるんだ」

「え、どこ？」

「お母さんのお腹の中だよ」

「え！ 本当に？」

「思い出して。お母さんがお姉ちゃんのことを食べちゃいたいって
言っていたことはない？」

「そういえば、お姉ちゃんに「食べちゃいたいくらい可愛いんだか
ら」と言っていたのを聞いたことがある。」

「お母さん、お姉ちゃんのこと食べちゃったの？」

「そうだよ。でも、まだ間に合うかもしれない。たつくんは赤ずき
んのお話知ってるでしょ？」

「知ってるよ」

そして薫さんはお姉ちゃんを助ける方法を教えてくれた。ぼくは
やり方を覚えてから、お母さんの部屋に入った。

「何？ たつくん」

ぼくは包丁でお母さんのお腹を刺した。お母さんは声を上げて手
足をびくびくさせたけど、やがて静かになった。お腹を切り裂いて、
お姉ちゃんのを探す。でもお母さんのお腹の中にいたのは、赤ち
ゃんだけだった。

「薫さん、お姉ちゃんいないよ？」

お母さんの部屋に入ってきた薫さんはぼくの声を見無視して、赤ち
ゃんを取り上げる。

「こいつさえ、処分してしまえば」

薫さんは続けた。

「このアマ、俺の子供なんだから妻と別れて結婚しろとかほざきや
がって。死んで当然だ」

そう言って笑い出した。ぼくには訳が分からなくて、ただ、お母
さんの瞳を見つめながら身体を揺さぶって、

「お姉ちゃんはどこ？」

と訊き続けた。

(後書き)

最後まで読んで下さりありがとうございます。何と四年ぶりのホラ
ー作品です。自分ではあまり怖くない作品ですが、少しでも楽しん
で頂けたなら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1529r/>

ぼくはもうすぐお兄ちゃんになる

2011年10月3日05時42分発行